

医療機関のための

付き添い食支援 ガイドブック

小児病棟付き添い食支援連絡会 えんたく 編

NPOと協働すると

支援が豊かに！

小児入院医療管理料を算定する病院は 付き添い者への食事支援が必須に

子どもが入院すると、病室に泊まり込んだり、自宅やファミリーハウス(家族の滞在施設)から通ったりしながら、看護を続ける親(特に母親)が多数います。しかし、付き添いの親は病人ではないため医療保険の対象にならず、食事や睡眠、入浴などの日常生活のサポートはほとんどありません。長年にわたり、このような状況が続いてきましたが、近年、支援団体に加え、当事者(親)自身がSNSを中心に付き添い生活の過酷さを発信するようになり、それがメディアに頻繁に取り上げられるようになったことで、一般社会でも「付き添い環境の改善は社会的課題である」と認識されるようになりました。

そして、付き添い者への支援、とりわけ食事に対するサポートが注目されるようになり、各地で付き添い経験者を中心に食支援を始める団体が増えています。また、多くの小児病棟では衛生管理の困難さを理由に付き添い食の提供には消極的でしたが、徐々に関心が高まり、さまざまな方法で付き添い食の提供を始める医療機関も出てきています。

さらに、令和6年度診療報酬改定によって小児入院医療管理料を算定する医療機関は否応なしに付き添い者の食事や睡眠などの環境改善に取り組みなければならなくなりました。一方で、小児科は不採算部門に位置づけられ、マンパワーも乏しいため、付き添い者の支援に取り組みたくても取り組めない小児病棟が続出することが心配されています。また、こども病院以外の医療機関では、経営管理者と診療報酬改定の内容が共有されておらず、付き添い者への支援に対して理解を得られにくいといった声も多数聞きます。

そこで、食支援を実践するNPO団体の連絡会である当団体では、付き添い食支援に対する医療関係者の理解と認識を深め、活動のヒントにさせていただくためにガイドブックを作成しました。本冊子では、国や支援団体の実態調査をもとに付き添い食をめぐる現状および付き添い者のニーズを解説するとともに、診療報酬改定以前から付き添い食支援を実施する医療機関の先進事例を紹介します。本冊子が医療関係者のみなさまの付き添い食支援活動の一助になることを心から願っています。

2024年6月

小児病棟付き添い食支援連絡会 えんたく

Contents

はじめに	02
小児病棟の付き添い食支援をめぐる現状と付き添い者のニーズ	03
Case1 聖路加国際病院	06
Case2 佐賀大学医学部附属病院	09
Case3 香川大学医学部附属病院	12
小児病棟付き添い食支援連絡会えんたくについて	15

複数の食事支援を組み合わせることで 実効性と付き添い者の 満足度が高まる

付き添い者の9割弱は病院からの 定期的な食事サービスを望んでいる

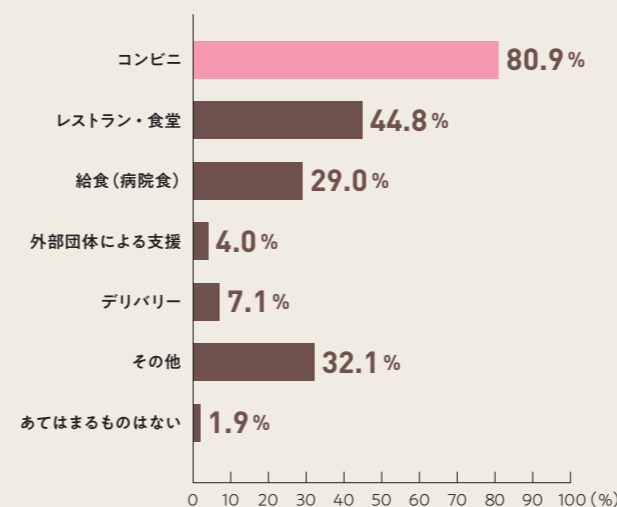
医療機関の多くは、これまで「付き添い者は病人ではない」という理由などから食事の提供を行ってきませんでした。令和5年度子ども・子育て支援推進調査研究事業として、国が医療機関を対象に実施した「入院中のこどもへの家族等の付添いに関する病院実態調査」(有効回答数349件、以下 国の実態調査)によると、付き添い者が食事を調達する場所として、コンビニが80.9%と最も多く、次いでレストラン・食堂が44.8%、給食(病院食)が29.0%と続きます(図表1)。給食(病院食)による食事提供を行っていない理由として最も多かったのが「患者の食事と帳簿等が分けられないから」(35.4%)というものです。次いで、「コストがかかる」(27.9%)、「人手が足りないから」(25.2%)、「家族からのニーズがないから」(23.0%)という理由が続きます(図表2)。

一方、付き添い者の大半は病院からの定期的な食

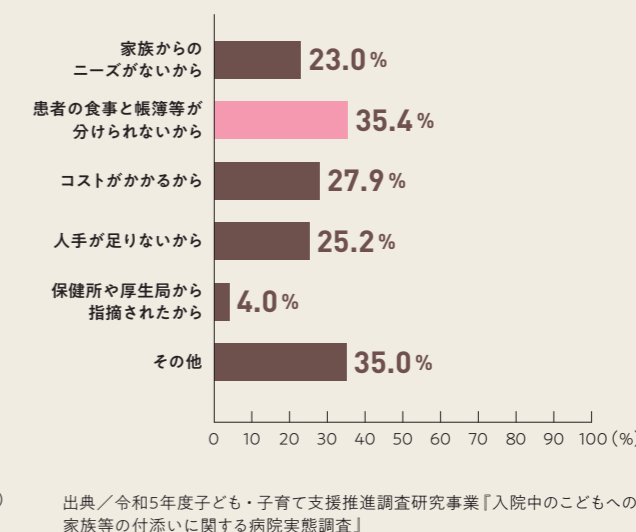
事サービスを望んでいることがわかっています。認定NPO法人キープ・ママ・スマイリングが付き添い経験者を対象に実施した『入院中の子どもに付き添い家族の生活実態調査2022』(有効回答数3643人、以下 KMS実態調査)によると、病院からの定期的な食事サービスを望んでいる人は87.3%に上りました。このうち、「有料でも利用する」と答えた人は66.3%を占め、この割合は年収200万円未満の低所得者層でもほとんど変わりませんでした。このようなニーズの背景には「食べる時間がない」「院内の売店などで食べ物が入りにくい」といった付き添い者の困り事があることが推測されます(図表3)。

また、病院から提供される食事を食べていたのはわずか5.6%でしたが、「病院から食事が提供されるようになってから栄養バランスのよい食事内容になった」という回答者のフリーコメントから推測されるように、病院から提供される食事を利用することで付き添い者の食生活はかなり改善されることが期待されます。

図表1 付き添いを行う
家族の食事環境 (複数回答)



図表2 給食(病院食)による
食事提供を行っていない理由



病院食による食事提供をする際には 付き添い者の経済状況にも配慮を

付き添い者の食事に関してこのような現状とニーズがある中、令和6年度診療報酬改定において小児入院医療管理料の算定要件として「小児の家族等が希望により付き添う場合は、当該家族等の食事や睡眠環境等の付き添う環境に配慮すること」が規定されました。そのため、小児入院医療管理料を算定する医療機関は付き添い者の食事支援に取り組まなければなりません。

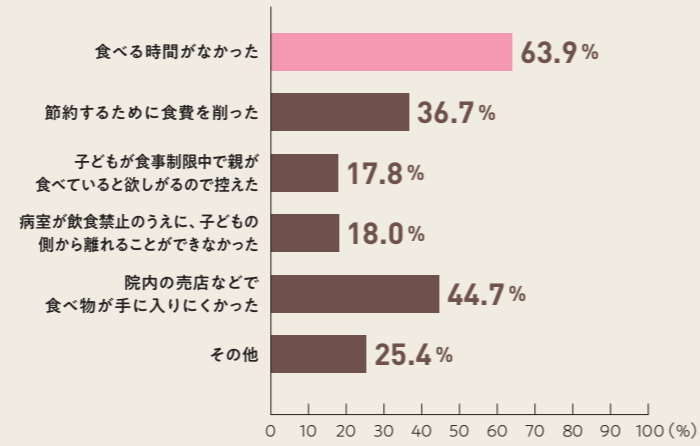
食事支援の方法として、これまでも一定数の医療機関が実施し、そして現在、各医療機関で検討が始まっているのが給食(病院食)による食事提供です。入院患者の成人用常食を付き添い食として有料で提供する方法が多く、前出の国の実態調査によると、家族向けに給食(病院食)を提供している医療機関のうち9割は昼食を提供していました(朝食・夕食はともに6割)。

この導入にあたっては、国の実態調査でも課題として挙がっていたように帳簿管理の負担が増すことのほか、常食と治療食を同じ厨房で調理できないことなどが障壁になる場合もあるようです。しかし、それぞれの医療機関で工夫を重ねながら取り組んでいることが国の実態調査からもうかがえます。

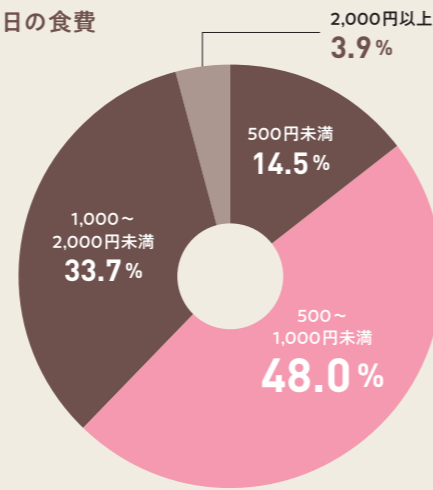
一方で、その利用率は決して高くなく、付き添い者の1~2割程度しかない医療機関が大半であると推察されます。原因としては値段の高さが考えられます。東京などの大都市部では1食分の値段が600~900円と高額です。入院時食事療養費の自己負担額(1食490円)に近い1食400円程度に設定する医療機関はあるものの、3食1セットで利用しなければならないことも少なくないようです。その場合は1日あたり1200円の食費がかかることになり、特に長期に付き添っている家族には大きな負担となります。

ファミリーハウスやホテルを含め、子どもの入院に泊まり込んで付き添うことになると、その家庭は二重生活となり、生活費が嵩むことがわかっています。前出のKMS実態調査によると、付き添い者が1日にかけている食費は「500~1000円未満」が48.0%と最も多く、500円未満の人も14.5%いました(図表4)。また、付き添い生活の中で節約していた人のうち、7割は飲食費を削っていることがわかっています(図表5)。さらに、付き添い中に経済的な不安を感じている人は全体の7割強を占めていました。形だけではない実効性のある食事支援を行うためには、付き添い者の経済状況にも配慮することが必要であるように思われます。

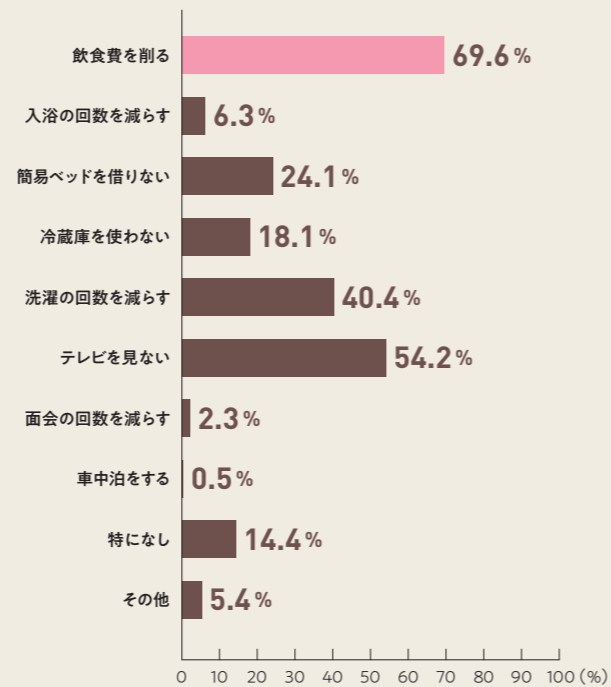
図表3 付き添い者が3食を食べない理由



図表4 1日の食費



図表5 付き添い生活の中で節約していたこと(複数回答)



出典/認定NPO法人キープ・ママ・スマイリング「入院中の子どもに付き添う家族の生活実態調査2022」

NPO・支援団体との連携や協働は 付き添い食支援の有効な手段の一つ

各地の医療機関では、給食(病院食)の提供以外にも、さまざまな食事支援に取り組んでいます。その形態には、①院内レストラン・売店によるデリバリー、②医療者の弁当注文の仕組みを活用した食事提供、③キッチンカー導入による食事提供、④NPO・支援団体等との連携による食事提供などがあります(図表6)。それぞれの形態には一長一短があり、食事支援の実効性と付き添い者の満足度を高めるには、複数の方法を組み合わせることで行うことが望ましいと思われま

す。これらの形態のうち、医療機関に注目していただきたいのが地域のNPO・支援団体との連携・協働による食事提供です。特にコストやマンパワーの関係から付き添い食支援に取り組めない医療機関にとって有効な手段の一つであると考えます。令和5年度子ども・子育て支援推進調査研究事業において作成された『入院中の子どもへの付添い等に関する医療機関の取組充実のための事例集』においても、「必要に応じて院外の支援団体との連携や、民間企業との連携も検討することで、限られたリソースの中で実現できることもある」と記載され、医療機関とNPO・企業との連携・協働によって付き添い環境改善が推進されることに期待を寄せています。

しかしながら、前出の国の実態調査によると、外部団体の支援による食事提供を実施している医療機関はわずか4%(図表1)で、地域の団体や施設と連携して付き添い支援を行っている医療機関も全体の15%程度に止まっています(図表7)。連携を行っていない理由としては「連携先に関する情報がいないため」が81%と最も多く、次いで「連携を行う必要性がないため」(49%)、「付き添いを伴う長期の入院等が少ないため」(42%)、「過去に連携を検討したことがないため」(19%)、「連携はせず施設等の紹介を行うに留めているため」(7%)が続きます。

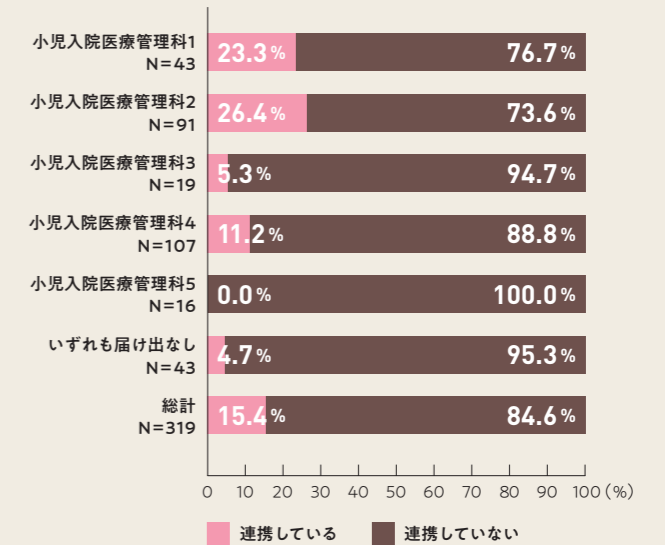
これらの理由とともに、医療機関からは「どのように連携すればよいかわからない」「連携に伴って病棟スタッフ(看護師)の負担が増えるのではないか」「連携のメリットを感じられない」といった声も聞こえてきます。そこで、このような疑問や不安を解決していただくために、次ページからNPO・支援団体と連携・協働しながら付き添い食支援に取り組む3つの医療機関の好事例を紹介します。院内で付き添い食支援を検討する際、これらの取り組みもぜひ参考にしてください。

図表6 小児病棟で実施している
付き添い者への食事支援の主な形態

支援の形態	提供方法と仕組みの留意点
給食(病院食)による有料の食事提供	付き添い者が事前にオーダーし、患児の食事と一緒に病室に配食する。自由価格で1食ごとの設定・3食同額であることが多い。オーダー内容(1食単位、3食1セット単位など)も医療機関ごとに異なる。付き添い食代は入院費等と一緒に請求する医療機関が多い。少数ながら無料で提供する医療機関もある。
院内レストラン・売店からのデリバリー	付き添い者が院内レストランや売店に注文すると、店舗から食事の配達、お弁当の取り置きをしてもらえる。オーダーの方法は電話注文、ネット注文、チケット制など医療機関によって異なる。相対的に値段が高いため、利用者が減り、サービスを中止したり閉店休業の状況になったりしている医療機関もある。
医療者の弁当注文の仕組みを活用した有料の食事提供	医師や看護師などスタッフのお弁当(昼食)注文を付き添い者も利用できるようにして、小児病棟まで弁当屋が昼食を配達する。導入している医療機関は少数だが、医療者への福利厚生士の仕組みを付き添い者に拡大することは意外に簡単に取り組めるようである。
キッチンカーによる有料の食事提供(※1)	医療機関の敷地にキッチンカーを受け入れ、食事やお弁当を販売する。医療者の福利厚生を兼ねるため、経営管理者の理解を得られやすい。付き添い割引価格で販売するキッチンカーもある。付き添い者は子どもの傍から離れづらく利用しにくい面もある。周知を含め、病棟スタッフの理解と協力が欠かせない。
NPO・支援団体等による有料の食事提供(※2)	NPO・支援団体が手作りのお弁当(主に昼食)を院内の敷地・病棟の指定場所・売店等で販売している。NPO・支援団体が運営しているのでお弁当の値段は安価で、割引販売していることも多い。また、メニューに工夫を凝らし、おいしさや栄養バランス、見た目の楽しさも大事にしている傾向がある。
NPO・支援団体等による無料の食事提供(※3)	NPO・支援団体が手作りのお弁当や飲食店から購入したお弁当を無料で提供(主に昼食)。無料であるがゆえに運営前にNPOと覚書を取り交わしたり、希望者のみに配付したりするなど安全面に対する責任の所在を明確にする工夫が行われている。心の支援にもつながり、付き添い者の満足度は相対的に高い。
飲食店による無料の食事提供(※4)	CSR(企業の社会的責任)の観点から飲食店がお弁当を無料で提供している(主に昼食)。廃棄がないように医療機関から事前に個数の指示を受け、NPO・支援団体が病棟までお弁当を配達する3者協働。地域の中にはCSRの観点から食支援に意欲を示す飲食店はあるため、NPOと連携することで実現の可能性あり。

出典/認定NPO法人キープ・ママ・スマイリング調査(2023年10月)
 ※1・2…令和5年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「入院中の子どもへの付添い等に関する医療機関の取組充実のための事例集」で好事例を紹介。
 ※3・4…本冊子にて好事例を紹介。

図表7 小児入院医療管理料別
周辺施設や団体との連携サービスの利用有無



出典/令和5年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「入院中の子どもへの家族等の付添いに関する病院実態調査」

聖路加国際病院

「子どもの笑顔」を守るために
付き添い家族への食支援に取り組む

お話を伺った方

小澤美和先生
(小児科部長・NICU室長)

山本光映さん
(小児総合医療センターナース
マネジャー・小児看護専門看護師)

三浦絵莉子さん
(こども医療支援室 チャイルド・
ライフ・スペシャリスト)

St. Luke's International Hospital

付き添い食支援の概要

【開始年】2018年
【実施頻度】毎月1回
【提供数】20食前後/回
【提供対象者】
入院児の付き添い者全員
(配付は希望者のみ)



聖路加国際病院(東京都中央区)小児病棟(31床)では、2018年から認定NPO法人キープ・ママ・スマイリング(東京都中央区・以下KMS)が実施する付き添い食(昼食・無料)の支援を受け入れています。この7年間で提供された食事は1120食(24年6月現在)に上ります。最初はKMSの調理スタッフによる手作り弁当を、家族の茶話会(2か月に1回のペースで開催)のときに配布していました。2020年にコロナ禍が始まるとKMSが調理スタッフによる手作り弁当を中止し、飲食店のお弁当を購入して届ける方法に切り替えたので、コロナ禍においても途切れることなく支援を継続することができました。

付き添い食支援の運用の流れは左表のとおりです。主に「こども医療支援室」がNPOとの連携・協働の担い手となり、なかでもこども医療支援室のスタッフ(チャイルド・ライフ・スペシャリスト、保育士)がキーパーソンです。24年6月現在、すべての入院患児の家族を対象とし、希望者全員に毎月1回、付き添い食と企業からの応援の品を提供しています。



CLSの三浦絵莉子さん(右)がKMSのスタッフからお弁当を受け取り、プレイルームのテーブルに並べて希望者に手渡す。コロナ禍の時期は病院の外でお弁当の受け渡しを行っていた。



付き添い食支援のワークフロー

Timeline	小児病棟の業務	支援団体の業務
10日~ 2週間前	◎食支援提供日の都合をメール連絡する	◎メールで食支援提供の予定日を知らせ、小児病棟の都合を確認する
1週間前	◎お弁当の個数を確定し、こども医療支援室スタッフが支援団体担当者に連絡する	◎個数確定を受け、協力飲食店にお弁当を発注する
提供前日	◎お弁当提供の案内チラシ(p8参照)を配布 ★こども医療支援室スタッフがチラシを作成 ★病棟の看護補助者がおやつ時間を活用し、おやつと一緒にチラシを配付	
提供当日 10:30~		◎支援団体担当者が協力飲食店でお弁当を受け取る。個数を確認したうえで病院に運ぶ
11:30~	◎小児病棟入り口でこども医療支援室スタッフがお弁当を受け取る	
12:00~	◎こども医療支援室スタッフがお弁当などをプレイルームの机に並べ、(p6参照)先着順でお弁当を配付する ★提供食に関する注意喚起(食事場所、消費期限の遵守など) ★支援団体アンケートへの協力依頼 ★受け取りに来られない希望者には、こども医療支援室スタッフが部屋まで持参 ★個数に余裕があるときは、当日入院の付き添い者や複数人で付き添っている家族に提供 ◎こども医療支援室スタッフが配付終了まで立ち合う	
13:30~	◎プレイルームの片付けおよび清掃を行って終了	

付き添い食支援 実施のポイント

- ① 支援団体の活動理念や食支援活動の目的を知ること、連携・協働できる相手なのかを判断しやすくなる。
- ② 食中毒の発生などに備え、医療機関のリスクを回避し、かつ責任の所在を明確にする方法として、食べたい人だけに配付する「選択希望制」がある。
- ③ 配布する際には消費期限の遵守や入院児への提供禁止について口頭で必ず伝え、配付終了まで担当者を立ち合わせるなど安全性の担保に努めることが大切。
- ④ チャイルド・ライフ・スペシャリスト(CLS)や保育士などがいる場合は、そのスタッフたちが食支援活動を担うことで病棟看護師への負担を減らせる。

point 01 付き添い食支援の目的と経緯

リソース不足に常に悩まされる小児病棟 外部団体と連携・協働してサポートを実現

聖路加国際病院小児病棟は、原則として24時間365日、入院患児の家族(中学生以上)の面会を許可しており、家族のライフスタイルに応じて付き添いができます。長期入院児の場合、家族の健康や子どもの成長を鑑みて付き添い入院は推奨していなかったため、食支援ニーズはあまり感じられなかったのですが、短期入院児や個室に隔離された入院児の場合は家族が泊まり込んで付き添うことが多く、明らかに食支援ニーズがあったといえます。

小児科部長の小澤美和先生をはじめ、小児病棟のスタッフたちは、付き添い家族への食支援は単にお腹を満たすだけのサポートではなく、「子どもの笑顔」を守るための大切な手段の一つであると位置づけています。医療者が患児の治療やケアに懸命に取り組んでも、患児のそばにいる家族が疲弊しては、患児が落ち着かず治療の効果も上がらないと認識しているのです。

一方で、小児科は診療報酬上の採算性が低く、常にリソース不足に悩まされています。それゆえに小児病棟のスタッフたちは、できない理由を数えるのではなく、どうすれば「子どもの笑顔」を守れるのかということに常に考えてきました。そして、その有効な手段の一つが外

部団体との連携・協働だったのです。聖路加国際病院はもともとボランティアの活用にも熱心で50年以上の歴史があります。小児科においてもこども医療支援室を中心に10ほどの外部団体と連携し、病児とその家族に対して、さまざまなサポートを行っています。KMSとの付き添い食支援もこの延長線上で実現したものです。

とはいえ、付き添い食の提供は、食中毒の発生など衛生管理面での不安がつきまとい、医療機関にとって外部団体との連携や協働には取り組みにくい分野です。それでもあえてKMSの食支援を受け入れる決め手になったのはその活動理念でした。「子どもたちの笑顔を守るために親の支援を行う」というKMSの考え方が、自分たちが大事にしている方針と一致していて、付き添い食支援の目的を共有できると感じたといえます。

小児科のリーダーである小澤先生は「親の心身の健康を守るうえで重要な食事を通して、親子が笑顔になれるのであれば、外部のサポートを積極的に受け入れる」と心を決め、小児病棟とこども医療支援室のスタッフもその方針に賛同しました。そして、KMSとも話し合いを重ねながら衛生管理における対応を中心に、誰もが安心できる運用方法を整えていきました。

Point
02 安全対策と配付等の工夫

食べたい人だけに配る
「選択希望制」にして
病院長の許可を得る

支援団体からの付き添い食を提供するにあたり、入院児の全家族を対象とする一方で、食べたい人だけに配付する「選択希望制(先着順)」としました。食中毒の発生などに備え、医療機関のリスクを回避し、かつ責任の所在を明確にするために付き添い者が自己責任で購入するお弁当と同じ扱いにしたのです。この考え方を示すことで、病院長と管理部門に医療機関が提供する食事ではないことを理解してもらい、受け入れの許可を得ました。

しかし、当初は手作り弁当の提供だったので、KMSのメンバーの中に「食品衛生責任者」の資格を有する者がいること、「調理安全の手引き」に則って調理が行われていることなどを事前に確認し、安全性の担保に努めたそうです。また、希望する家族に配付する際には、こども医療支援室のスタッフが消費期限を守ることや入院児に食べさせないことなどの注意喚起を口頭で行いながら一人ひとりにお弁当を手渡し、異物混入などの事故を防ぐために配付終了まで配付場所に立ち合っています。

さらに、KMSとの事前連絡、家族へのチラシづくり、当日のお弁当の受け取りなどの業務も、こども医療支援室のスタッフが担うことで病棟看護師に負担がかからないように配慮しています。

付き添い食支援の効果

コロナ禍でも社会や人と「つながっている」喜びを

付き添い食支援のメリットはコロナ禍で特に際立ちました。小澤先生は「感染防止対策で病棟から一歩も出られない日々の中、入院児や家族は院外から届くお弁当や応援メッセージによって社会とつながることができました。その喜びは生きる力になりました」と振り返ります。

小児病棟では、外部からの支援があった際、そのことを入院児や家族に必ず伝えていきます。それは、子どもたちに「社会から支えられ、社会とつながっていること」を実感してほしいからです。病院という閉ざされた空間に

保護者のみなさまへ
ミール（お弁当）サポートのお知らせ

保護者のみなさま、いつもおつかれさます。

病気の子どもさんや発達がゆっくりな子どもさんのお母さんを応援している、「NPO キープ・ママ・スマイリング」さんより保護者の皆様へお弁当の差し入れがあります。下記の下記の時間にプレイルームで配布させていただきますので、時間内にお越しください。※お弁当は保護者の方専用です。

開催日時： 4月22日(月)
12:00～13:00
配布場所： プレイルーム

※ご注意！ただいま感染予防のため、以下の点をよくご確認ください

- マスクをはずしての飲食による感染防止のため、全館ロビーでの飲食はご遠慮いただいております。
- 大部隊の方は本館1Fのスターバックス前の広場、または聖路加タワー2Fの広場など人の少ない場所で食事をとっていただくようお願いいたします。
- 個室の方は病室内で飲食をされる場合はお子さんと同時に食事をすること、会話をしながらの食事は控えください。

限定20食となりますので、お早め！

ご質問は保育士またはCLSまで！

こども医療支援室のスタッフが食支援を知らせるチラシを作成し、看護補助者が入院児のおやつと一緒にチラシを配布する。チラシにも注意事項を大きく記載するなど工夫を凝らす。



「つばめグリル」(左上)、「味の中華 羽衣 銀座本店」(左下)、「銀座 日東コーナー1948」(右)など東京・銀座の老舗飲食店がこの付き添い食支援活動に次々と協力している。

隔離されている子どもたちの社会性を育む面でも、食支援は大きな意味がある活動だと捉えています。

また、KMSが飲食店のお弁当を購入して届ける活動はコロナ禍で窮地に立たされた地域の飲食店を助けることにも役立ちました。間接的ではあるものの、コロナ禍でも食支援の受け入れをやめなかった聖路加国際病院が地域に貢献することにつながったのです。NPOと連携・協働することによって、医療機関も地域の助け合いの循環に参加できる好事例だといえるでしょう。

Case

佐賀大学 医学部附属病院

食支援を通して入院児の家族に
応援メッセージを届ける

お話を伺った方

- 松尾宗明先生 (小児科教授)
- 酒井宏子さん (こどもセンター 看護師長)
- 山田つや子さん (こどもセンター 前・看護師長)

Saga University Hospital

- 付き添い食支援の概要
- 【開始年】2019年
 - 【実施頻度】毎月1回
 - 【提供数】20～25食前後/回
 - 【提供対象者】入院児の付き添い者全員(配付時間に滞在している人のみ)



佐賀大学医学部附属病院(佐賀県佐賀市)こどもセンター(31床)では、ボランティアスタッフからの提案をきっかけに、2019年より認定NPO法人キープ・ママ・スマイリング(以下KMS)の付き添い者向けオリジナル缶詰の定期配布を開始しました。

2021年にはKMS、佐賀市で結婚式場を運営する株式会社ディーアズ・ブレイン(東京都港区)、佐賀大学の学生・OBが組織する任意団体ノギ(佐賀県佐賀市)の3者と協働し、付き添い者に季節のイベント食を届ける「お弁当deスマイリングin佐賀大学病院」をスタートさせ、初回のクリスマスイベントの様子は地元のメディアにも大きく取り上げられました。

23年8月以降は、KMS佐賀スタッフが地域の飲食店のお弁当を昼食用に購入して届ける食支援活動が定着。イベント食を含め、これまでに407食(24年6月現在)を提供しています。こどもセンターの看護師長を中心に病棟スタッフと連携し、毎月1回、付き添い者のもとへ20～25食前後のお弁当と企業からの応援の品が届けられています。

付き添い食支援のワークフロー

Timeline	小児病棟の業務	支援団体の業務
10日～2週間前	◎食支援提供日の都合をメール連絡する	◎メールで食支援提供の予定日を知らせ、小児病棟の都合を確認する
1週間前	◎お弁当の個数を確定し、看護師長が支援団体担当者にメール連絡する	◎個数確定を受け、協力飲食店にお弁当を発注する
提供当日 12:00		◎支援団体担当者が協力飲食店でお弁当を受け取る。個数を確認したうえで病院に運ぶ
12:30～	◎小児病棟入り口で看護師長がお弁当を受け取る。個数等を確認しつつ、お弁当を病棟のワゴンに並べ替える ◎看護師長と看護師が各病室を回り、希望者にお弁当を配付する ★提供食に関する注意喚起(消費期限の遵守など) ★支援団体アンケートへの協力依頼(P11参照)	
12:45	◎配付終了 ワゴンを片付ける	



入院児には手作りのおもちゃをプレゼント



看護師長の酒井宏子さんがKMS佐賀スタッフからお弁当を受け取る。ワゴンにお弁当を載せて各病室を回り、支援団体からの提供であることを伝えながら希望者にお弁当を手渡す。

- ① 衛生管理面で不安がある場合は、安全性の高い缶詰やレトルト食品の受け入れから始め、信頼を深める中でお弁当などの定期配布に拡大していく方法がある。
- ② 付き添い食支援の受け入れに際して、医療機関とNPO団体それぞれの責任の所在を明確にするために「食品配布活動許諾契約書」などを締結しておくのもよい。
- ③ 付き添い食を提供することは「医療機関が付き添い家族を気遣い、応援している」というメッセージになり、家族と医療者の信頼関係がさらに深まる効果がある。
- ④ 食支援の受け入れが決まったら、お弁当配布で一時的に増える廃棄物の処理について管理部門に事前に相談をしておくことで安心して始められる。

Point 01 付き添い食支援の目的と経緯

普通の食事より衛生管理面で安心できる 缶詰から食支援活動をスタート

佐賀大学医学部附属病院小児科は、早くから長期入院の子どもとその家族の生活支援に取り組んできました。小児科教授の松尾宗明先生は、家族に過度の負担がかかっていることを認識していたので、付き添い環境を改善したいとずっと思っていたそうです。2017年にはクラウドファンディングで資金を募り、佐賀県初となる家族滞在施設「ファミリーハウス佐賀」を病院の敷地内に開設しました。

一方、食支援についても病院食(常食)を付き添い者に提供することを検討したものの、提供頻度や採算面の課題を解決できず断念した経緯があります。外部からの食支援の話が持ち上がったのは、ちょうどそのタイミングでした。こどもセンターのボランティアスタッフから「KMSが付き添い者向けのオリジナル缶詰を開発し、提供する医療機関を探しているというテレビのニュースを見ました。こどもセンターで受け入れることはできませんか」という提案を受けたのです。松尾先生は、缶詰なら普通の食事より衛生管理面で安全性が高いと判断し、KMSの受け入れを決めました。缶詰だったので院長と管理部門の許可も得やすかったといいます。それぞれの責任の所在を明確にするためにKMSと佐賀大学病院で「食品配布活動許諾契約書」を締結したうえで配

布を始めました。そして、月1回の缶詰による食支援活動を継続する中で、信頼関係が徐々に深まり、その後のイベント食やお弁当の定期配布へと発展していきました。

外部団体による食支援活動は月1回のことが多く、毎日の食事や栄養を補うサポートとしては不十分です。松尾先生は、この食支援について「缶詰やお弁当を通して入院児に付き添っている親御さんに“がんばってください”という医療機関や社会からの応援メッセージを届けること」だと認識しています。だからこそ、KMSとの連携・協働を決めたとも。病室で子どもと2人だけで過ごす時間が長い親たちは孤独になりやすいといわれます。「付き添い者が誰かに支えられているという実感を持つことができるのは心の支援にもつながり、とても大切なことです」と松尾先生は言います。

付き添い食支援の実施にあたり、もう一つ懸念されたのは病棟看護師の負担が増えることでした。しかし、缶詰やお弁当を受け取った付き添い者の笑顔を見ると、看護師たちには嬉しい気持ちが湧き上がり、事前の準備や配布の手間も報われるそうです。そして、お弁当を配布した日はそれが話題のタネになるので、付き添い者との会話も弾み、「また届けてあげたい」という好循環が生まれています。

Point 02 安全対策と配付等の工夫

看護師が手分けして ベッドサイドに届け、 注意事項を伝える

付き添い者にお弁当を配布するのは通常12時半です。看護師の休憩時間とも重なり、スタッフ数が半減する中、看護師長と数人の看護師が手分けして希望者のベッドサイドまで届けます。その際、入院児の誤食を防ぐために「お母さんのご飯ですよ」と声をかけ、家族には消費期限の遵守と食アレルギーへの対策として食べる前に食材を必ず確認するよう注意喚起しています。また、KMSを通して企業からの応援の品物がある場合は食品ロス対策で賞味期限の短い商品を譲ってもらっていることが多いため、賞味期限を確認し、早めに食べるように声かけしています。

コロナ禍の前には、個別包装された缶詰をKMS佐賀スタッフとともに配っていました。このときに比べると、看護師の負担は増えましたが、実際の配布時間は10～15分程度なので大きな問題ないそうです。お弁当と一緒に配布するチラシはKMSが作成しており、看護師の事務作業的な負担を補ってくれています。

運用に際して注意しておきたいのはゴミの処理です。生ゴミやお弁当がらが一時的に増えるため、事前に管理部門と相談しておくのがよいそうです。

付き添い食支援の効果

付き添い環境の課題に対し、院内で問題意識を持つきっかけに

小児科では、KMSの食支援をきっかけに入院児の家族に付き添い食のアンケート調査を実施。その結果をもとに小児病棟スタッフと栄養部、事務スタッフで話し合いを重ね、一時期、院内レストランからのデリバリーサービスを行っていました(コロナ禍により中止)。松尾先生は「小児病棟のスタッフだけでなく、関連する部門のスタッフがこの課題に対して問題意識を持つことに役立った」とNPOと連携・協働するメリットを話します。

また、KMSが子どもたちのために折り紙で作ったおも



KMS東京スタッフがお弁当と一緒に配布するチラシを作成することで看護師の事務的作業の負担を軽減。チラシは季節感と飲食店からの応援メッセージを掲載することを大切にしている。



結婚式場に続き、地域のさまざまな飲食店が協力。就労支援事業所のハンバーガーセットを届けたことも。佐賀でも付き添い食支援を通じた地域の助け合いの循環が始まっている。

3 香川大学医学部附属病院

小児病棟での付き添い食支援を 地域で支える子育て支援の始まりに

お話を伺った方

日下 隆 先生
(小児科教授)

松木由美さん
(小児病棟看護師長)

松本裕子さん
(香川県立保健医療大学
看護学科講師)

諏訪亜季子さん
(香川県立保健医療大学
看護学科助教)

Kagawa University Hospital

付き添い食支援の概要

【開始年】2022年

【実施頻度】毎週1回

【提供数】10食前後/回

【提供対象者】

概ね1か月以上の入院児の
付き添い者



香川大学医学部附属病院(香川県木田郡)小児病棟(38床)は、2022年から外部団体と連携・協働した食支援活動に取り組んでいます。始めたきっかけは認定NPO法人キープ・ママ・スマイリング(以下KMS)が実施した「タケダ・ウェルビーイング・プログラム 食支援パイロット事業」に参加したことでした。パイロット事業のキーパーソンであった香川県立保健医療大学看護学科の教員有志が事業を引き継ぎ、地域で支える仕組みを再構築し、現在の食支援の形「お接待ミールall in 香川」へと発展しています。

教員有志がロジスティクスを担い、地元で飲食店を経営する株式会社平井料理システムから無償提供される10食前後の「付き添いランチ」を毎週1回、小児病棟に届けています。小児病棟では看護師長が中心となり、安全性を担保するために家族に付き添いランチを手渡ししています。これまでに配布したのは478食(24年6月現在)です。この頻度で外部からの食支援を実施する医療機関は全国で数えるほどしかなく、まさに“all in 香川”の熱意によりこの活動が継続しているのです。



付き添い者の食事環境と日下 隆 小児科教授(右)の思いを知った株式会社平井料理システムの平井利彦 代表取締役社長(左)が週1回の付き添い食の無償提供を申し出た。

付き添い食支援 実施のポイント

- ① 子どもたちが退院したときに安心して自宅に戻れるよう、親が疲弊しないよう子育て支援の一環として付き添い環境の整備に取り組む。
- ② 自分たちの理念や方針を理解してくれる地域の支援者と積極的に連携・協働することで「できない」が「できる」に変わり、付き添い食の提供が可能になる。
- ③ 看護師長だけでなく、スタッフも「付き添い食の提供は家族ケアの一環」として認識できると、負担に感じることなく前向きに付き添い食支援に取り組める。
- ④ 閉ざされた病院の中にとると食支援が“社会の窓”の役割を果たしてくれるため、安全性を優先しつつ、支援者の心遣いを伝えることを大切にする。

point 01 付き添い食支援の目的と経緯

地域の支援者と連携・協働することで 「できない」を「できる」に変える

香川大学医学部附属病院小児病棟では、子育て支援の一環として付き添い環境の整備に取り組んできました。小児科教授の日下 隆先生は「子どもは一時的に入院していてもやがて退院して自宅に戻ります。そのときに安心して帰れるように付き添い中のお母さんやお父さんの心と体もケアし、その健康を守ることが欠かせません。これは小児科の医師や看護師に課せられた大切な役割の一つなのです」といいます。

なかでも健康のベースとなる食事については「授乳中の母親が質のよい母乳を与えるのは、治療効果や予後にも影響することだから栄養バランスを考えた食事が必要である」と考えていたものの、その調達には売店や院内レストランでの購入、もしくは家族からの差し入れに頼る状況でした。

このような中、舞い込んできたのが外部からの食支援の申し出だったのです。しかもパイロット事業に続いて提供されるお弁当は週1回の定期配布にもかかわらずCSR(企業の社会的責任)の観点から無償提供するという願ってもない条件でした。「長期入院児の家族をはじめ、必要な人においしい食事を届けられるのであれば受け入れないという選択肢はない。付き添い者への支

援をしてくれる人が一人でも増えることが大事だ」と日下先生は即決しました。事務部を通して院内で調整した後、病院運営委員会での協議を経て、小児病棟での食支援活動は許可されました。飲食店が提供する食事であれば売店で販売しているお弁当と変わらないため、衛生管理面でも問題がないと判断されたのです。

そして、食支援を継続するうえで課題となった運搬を含むロジスティクスを大学教員が担うことで実現が可能になりました。「付き添い家族への支援が子育て支援の一つとして認知される社会に変えていきたいという日下先生の考え方に共感し、力になりたいと思ったのです」と香川県立保健医療大学教員の諏訪亜季さんと松本裕子さんはいます。

「お接待ミールall in 香川」のゴールは付き添い食の支援だけではありません。この活動を通して、その先にある、地域社会による子育て支援を育んでいくことなのです。自分たちの理念や方針を理解してくれる地域の支援者と積極的に連携・協働することで「できない」が「できる」に変わり、さらに院内のスタッフだけでは見ることのできない新しい景色が見えてきています。

付き添い食支援のワークフロー

Timeline	小児病棟の業務	支援団体の業務
2日前	○看護師長が付き添い対象者にアンケート用紙と申込書を配布する	
前日	○看護師長が申込書を回収し、個数確定し、支援団体担当者に連絡する	○個数の確定を受け、協力飲食店に発注する
提供当日 10:50		○支援団体担当者とボランティアが協力飲食店でお弁当を受け取り、病院まで届ける
11:30~ 11:40	○小児病棟の入口で看護師長または看護師がお弁当を受け取る	
11:40~ 12:00	○看護師長または看護師が各病室を回り、希望者にお弁当を配付する ★提供食に関する注意喚起(食材の注意点、消費期限の遵守など) ★支援団体アンケートへの協力依頼(P14参照)	



「食支援は子育て支援」という考えから地域で医療的ケア児を育てる家族にも同時に配布が始まった。



安全性を優先しつつ、支援者の心遣いを伝えることも大切に

「切実に支援を必要としている人に付き添い食を提供したい」という協力企業の思いを大切に、概ね1か月以上の入院が見込まれる子どもの付き添い家族を対象とし、記名式の事前申し込み制としています。ただ、入院期間は変動するため、看護師長が入院20日目を過ぎた頃から声をかけ、退院までに1、2回の利用ができるように配慮しています。

また、配付の際は看護師長が申し込んだ家族の病室を回り、一人ひとりにお弁当を手渡ししています。ときに季節を感じられる生花がお弁当に添えられていることもあります。免疫力が低下している入院児の病室には持ち込めないため、生花は写真に収め、配付の際に生花を渡せない理由を話したうえで写真を見せるようにしています。看護師長の松木由美さんは「安全を確保しつつ、付き添い家族を応援する支援者の心を届けることを大切にしている」と話します。

さらに看護師長が不在の場合は、事前にスタッフに情報を共有し、配付ミスが起こらないように気をつけています。入院児の昼食配膳やスタッフの休憩と重なる時間帯ですが、スタッフも「付き添い食の提供は家族ケアの一環」として認識しているので、負担に感じることなく前向きに取り組んでいます。

付き添い食支援の効果

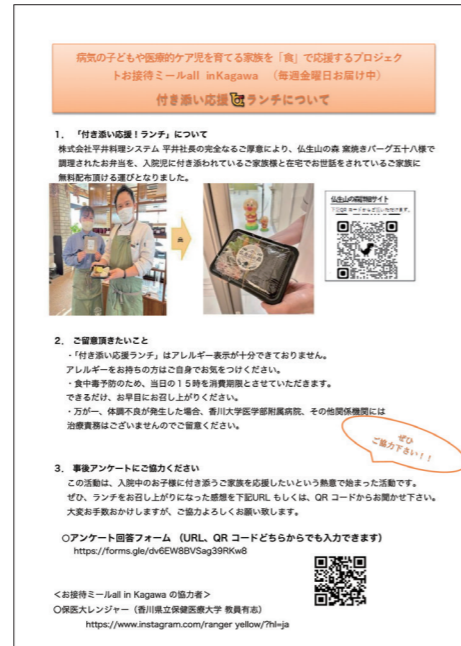
食支援が「治療意欲の向上」や「退院のモチベーション」に

1か月以上入院している入院児の多くは慢性疾患で、なかには深刻な病気の場合もあります。「外の空気に触れられない子どもたちにとって周りには大人は“社会の窓”であり、その交流を通して社会を知るのです。それは付き添っている親も同じで、閉ざされた病院の中にとくと食支援が“社会の窓”の役割を果たしてくれていると思います」と日下先生。

子どもたちは自分が食べられないにもかかわらず、親がお弁当を受け取ると「よかったね」と一緒に喜んでい

るそうです。親の笑顔が入院児にとって何よりの心薬になっているのです。そして、「早く病気を治して退院したら一緒に食べに行こうね」と治療意欲の向上や退院へのモチベーションにも役立っています。

お弁当を調製している飲食店「仏生山の森」には、「子どもがお礼に行こうというので伺いました」と家族で食事に訪れた人もいます。お弁当提供後のアンケートへの感想を含め、こうした交流が支援者の継続する力になっています。



香川県立医療保健大学の教員有志が配布チラシを作成し、看護師の事務的作業を軽減。チラシには作り手の写真を添え、喫食の際の注意事項やアンケート協力の依頼も記載されている。



お弁当の調製は株式会社平井料理システムグループの「仏生山の森」が担当。季節感を演出することを心がけ、食事のおいしさとともに笑顔になれる時間を提供している。

食支援活動に取り組む仲間づくりと付き添い食提供の普及を目指して

小児病棟付き添い食支援連絡会 えんたく

設立目的

2023年9月、各地で食支援活動に取り組むNPO11団体が発起人となり、「小児病棟付き添い食支援連絡会 えんたく」を設立しました。この連絡会では、ゆるやかな連帯のもと、全国で付き添い食支援活動を実践する仲間を増やし、小児病棟における付き添い食提供の普及を目的としています。

活動内容

2024年上半期の活動として全5回の「付き添い食を提供したい人・団体のための運営ノウハウ連続講座」(オンライン)を実施しました。病児の家族、支援団体関係者を中心に毎回30~50名が参加し、専門家や実績のある支援団体から運営ノウハウを学びました。この講座を受講した参加者の中から新たに付き添い食支援を始めた人も出ています。下半期においても連続講座を実施し、食支援活動に取り組む人・団体の掘り起こしと各団体の付き添い食支援活動の維持・向上を図っていきます。また、付き添い食に関する情報を積極的に発信し、医療機関や一般社会に向けての啓発活動にも取り組んでいます。

連絡会名「えんたく」に込めた、私たちの想い

「えんたく」とは、丸いテーブルを意味し、円卓、縁卓といった漢字をあてはめることができます。非日常が続く小児病棟でも美味しいごはんの差し入れで、親御さんが病気のお子さんと同じ食卓を囲み、そこに笑顔が生まれることを願って活動している私たちの想いを表現しています。また、NPO団体、小児医療関係者など、付き添い食支援活動に縁ある者がみんなでテーブルを囲み、立場や役職に関係なく、意見交換や協働作業を行える場になることを願って名付けました。

付き添い食支援に関するデータ

令和5年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

「入院中の子どもへの家族等の付添いに関する病院実態調査」
「入院中の子どもへの付添い等に関する医療機関の取組充実のための事例集」



小児病棟付き添い食支援連絡会 えんたく
発起人／幹事団体 (敬称略・順不同)

宮城県	NPO法人アンドブライツ
茨城県	HiStar'Snow☆Tukuba
群馬県	付き添いパパママ応援キッチンカー fufufu-soup
東京都	認定NPO法人キープ・ママ・スマイリング
神奈川県	認定NPO法人スマイルオブキッズ
愛知県	小児がんファミリーピアサポーター 和楽~waraku~
広島県	インクルーシブ交流&付き添い入院応援「ぼこぼこトレイン」
香川県	お接待ミールall in 香川
福岡県	NPO法人福岡ファミリーハウス
大分県	大分県医療的ケア児者の親子サークル ここから
沖縄県	一般社団法人 Kukurū

医療機関からの食支援のご相談をお待ちしています!

「えんたく」では、NPO団体と連携して付き添い食支援を始めることを検討している医療機関(小児病棟)様からのご質問やご相談を承っています。どのようなことでも結構ですので、お気軽にご連絡ください。

問い合わせ先

小児病棟付き添い食支援連絡会
えんたく事務局
(認定NPO法人
キープ・ママ・スマイリング内)
Email:
entak@momsmile.jp



認定NPO法人 キープ・ママ・スマイリング

「入院中の子どもに付き添う家族の生活実態調査2022」



発行日／2024年6月30日

制作・発行／認定NPO法人キープ・ママ・スマイリング
デザイン／竹田正典（株式会社ファントムグラフィックス）

取材・執筆／井手ゆきえ

企画・編集・執筆／渡辺千鶴

本冊子は「タケダ・ウェルビーイング・プログラム2023」の助成により制作・発行しています。
本冊子掲載の記事・図版等の無断複写・複製・転載を禁じます。